４の中にトラ模様の５。

毛玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
４の中にトラ模様の５。

【Ｎコード】
Ｎ６７２９Ｚ

【作者名】
毛玉

【あらすじ】
悲劇の聖杯戦争を喜劇に。でも明日が見えない、それが虎結界。
第四次聖杯戦争に虎聖杯をミックスしてみよう！
＊これは作者の妄想によるお話です。本気にしないでください。

予告（前書き）

はじめまして、毛玉です。
文章書くのが初心者な上に、Ｆａｔｅシリーズ全てうろ覚えというかなり悲しい脳みその持ち主です。
予告はとりあえずセリフだけです。
それでも大丈夫な方はどうぞ～（ダメな人は急いでバック！）

予告

終わった。
その日、偶然か必然か同じ時に同じものを求めた者たちは悟った。
聖杯の～なんちゃら以下省略。
そんな呪文を言って、それぞれが覚悟の上で挑んだものは微塵もなく砕かれた。

～毎度おなじみ聖杯戦争、開幕編～

「呼ばれて飛び出て、歩いてきたわ！　カレイドルビーここに爆誕！！」
「その道連れアーチャー惨状（誤字にあらず）」
「・・・終わりだ綺礼。この戦い、もう無理だ」
優雅、なにそれおいしいの。

「やっちゃえバーサーカー！」
「了解致しました、お嬢様。我が身に変えても！」
「ぐはぁ！・・・え、無理。これ無理」
血を吐いて瀕死状態。きっと彼のステータスは幸運Dクラス。

「くすくすごーごー。目指せ真ヒロインルート！！！」
「ひいい！　桜、くろ、黒い触手がー！」
「ラスボス降臨！？」
魂が抜かれた。
そこだけ原作通りになりそうなヒロイン・ウェイバーちゃん。

「あああ、渾身の肉じゃがが、宗一郎様の昼食が！」
「気にするなキャスター」

「すげぇ、青紫！それ毒薬でしょ！」
龍之介終了のお知らせ。

「むーむーむー！」
「うるさいわよ、駄犬が」
「カレン！ランサーを離しなさい！」
「こ、これが日本の伝統昼ドラね！」
「そうか、これが昼ドラか・・・」
ソラウ、ケイネス異文化を学習。

「アサシンや、お昼ごはんはまだかのぉ？」
「魔術師殿、お昼は先程済ませたじゃないですか」
「おうおう、そうか。では朝食はいつになるかのぉ？」
「・・・食うか？」
そっと麻婆豆腐を差し出す神父。第一級死亡フラグがここにはあった。

「私のマスターならば、この三倍の食事をもってこい！」
「セイバー、おかわりならもうないぞ」
「そ、そんな！？」
「切嗣、とりあえずお料理したほうがいいのかしら？」
「待つんだアイリ、そんな（悲劇メシマズ）ことをしなくていい」

予告（後書き）

第五次メンバーはお昼時に呼ばれたようです。

序章（前書き）

ゆっくり投稿。ようやく序章です。
実は虎聖杯っていうかゲームをした事無いのでよく知らない。
でもいいよね？これは妄想です。って三回唱えて暗示ができた人はGO

序章

その日、冬木の街は記録的な虎日和だった。
「ああ、こんな時期か」
――とある冬木のご家庭。
人外魔境の家主、衛宮士郎は晴れ渡ったトラ模様の空を眺めつぶやいた。
ピンポンパンポーン♪
「えー、毎度おなじみ虎聖杯、虎聖杯でーございます」
そこへタイミングよく飛び込んでくる、聞きなれた人間代表不思議生物「タイガー」の声。
「・・・やっぱり」
予想道理の声が響き、遠い目をして、ふうっと息をついた。
だが、目前に差し迫った戦い「昼食」を優先しようと彼は手を動かした。
味噌汁の味付けをしつつ、釣られたばかりの新鮮な魚を捌く。
米は蒸らし時間も兼ねて、副菜・主菜の全てが揃ったときに美味しくいただける。
「完璧だ」
日本の正しい食事、自らの采配に満足気に頷いた。
そして、出来上がった食事を机の上に配膳する。
きちんと正座をして待つ者、配膳を手伝おうとするもの、何か金策を考えているもの、それに《金策》ちょっかいを出しているもの、昼ドラを眺め嘲笑しているもの、履歴書を書いているもの、・・・混沌としている。
「おーい、ご飯だからみんな席についてくれ」
「「「「「「「はーい」」」」」」」
全員に呼びかけると、良い子の返事をしていそいそと席についた。
「じゃあ、いただきます」

「「「「「「いただきます」」」」」」
習慣になってい挨拶をし、食事に手をのばす。
「もぐもぐ・・・、このタレがなんとも言えず」
「うう、またレベルが上がってます。先輩この味付けって・・・」
「ああ、それならーーだぞ」
「士郎ってほんと和食はおいしいわよねー」
「シロウ、いつでも私のメイドになっていいからね？」
「メイドって、なんでさ。せめて執事がいいぞ」
「下僕に成り下がりたいなんて、では教会の掃除を・・・」
「いや別に下僕になりたいわけでは、って昨日ランサー掃除してなかったか？」
「士郎くん、後で面接の練習をお願いしていいでしょうか？」
「――あんた、また落ちたのか」
ワイワイ、キャッキャ。衛宮邸は今日も平和です。

―完―

「って、くおらぁぁぁぁぁ！！！」
バーン！そんな音と共に障子を吹き飛ばし虎は吠えた。
「なーにが　―完―。っよ！　例え真っ赤なお月様が落ちてこようともお姉ちゃんはそんな終わりは許さないだから！！」
「藤ねえ、食事時に行儀が悪いぞ。ほら茶碗、ご飯はこれくらいでいいだろう？」
「わーい、ツヤツヤの米が噛み締めるごとに甘みを増すわー。味噌汁と味のハーモニー！ってちっがーう！ご飯ごときでおねいちゃんを懐柔しようなんて甘い！」
「でも、藤村先生しっかり食べるのね」

「席にもちゃっかりついてますしね」
うっかり遺伝子を内包する姉妹は息ぴったりに大河の行動を口にした。
「だってー、士郎のご飯を食べないなんて勿体無いじゃないのよう。お残し厳禁、食事が回れば世も回る。食事は真理です」
キリッと告げる大河、その頬には米粒が付いている。
「藤ねえ・・・」
「いえ、士郎。大河の言い分は正しい。食事はなくてはならないものです、美味しければ美味しいほどに、・・・人は満たされる」
ほうっと息をつき、威厳に満ち溢れながら食卓の王は微笑んだ。
「ええ、よって士郎おかわりを」
「・・・はい」
ナゼダロウ、ショッパイミズガナガレソウダ。
「あーもう、士郎のせいで話が脱線しちゃったじゃない」
ガツガツとハイスピードで食事を食らった大河はお茶をぐいっと飲みながら言った。
「あー、藤ねえ。虎聖杯なら要りません。うちは間に合ってます」
「何よー、みんなしてスルーして。聖杯戦争しなきゃ物語は始まらないのよー」
「・・・だってなぁ。毎回ろくでもない結果しか生まないじゃないか？　そんなもの誰も欲しがらないって、いい加減みんな懲りたって。なあみんなもそう思うだろ？」
「ええ。・・・ナイチチ、マジョッコ」ボソッ。
「はい。・・・ハーレム」ボソッ。
「そうね。・・・紳士バーサーカーなんて嫌」ボソっ。
一部黒歴史を思い出したのか沈んだ顔をしているが、みんなが意見を同じにした。
「・・・うわーん！　なによ、なによそんなに聖杯なんていらないなんて・・・。あ！」
ぴこーんと猫の目になった大河。

「藤ねえ？」
良からぬことを考えつきました言わんばかりのその目に、士郎が阻止しようと声をかける。
しかし、大河はさっと立ち上がりニンマリと笑い宣言した。
「そうよー、欲しがっている人がいるならそっちに行けばいいのよね！」
「は？　いや、誰もほしがってないからこういう事になってるんだろ」
「ふふん。聖杯戦争が始まらないなら、始めて見せよう虎聖杯！
じゃあそういうわけでいってらっしゃーい！！」
そう大河が入った途端、全員の足元が光った。
それは見覚えのあるもので。ぶっちゃけサーヴァント召喚陣だった。
「なんでさ！」

序章（後書き）

キャラクターの口調がわからないｏｒｚ
藤ねえ、あなたがいると話がつるっといろんな方向に滑って纏まらない。
序章でしんどいわ―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6729z/

４の中にトラ模様の５。

2011年12月25日20時50分発行